

福岡県教育委員会賞

見慣れた風景 ここにしかない風景

福岡県八女市
八女市立矢部中学校1年

岡 一成

僕の両親は僕がまだ歩き始めたばかりの頃から、散歩といつて僕を自然につれだしてくれました。それは今もつづいていて、週に一回の散歩は僕の生活習慣になりつつあります。一人で散歩することはあまりなく、友達や家族で行くことが多いです。

いつも歩いているコースは、距離でいうと家から1kmもないですが、最初から最後まで急な坂がつづき、今の僕でも二十分かかります。まわりは杉やひのきの針葉樹ばかりで、坂道を歩いているときに話をしたら、息が切れそうになるほどきついんです。でも峠まで行くと、釈迦岳から御側方面を一気に見わたせる風通しのよい最高の場所に出ます。そこは高压線や電波塔がなく、棚田や大杉公園が一望できるいいながめです。

小さい頃は、友達と散歩コースを歩いたり、走ったりして、遊んでばかりで気づかなかったのですが、最近季節によって時間によって、全然ちがう風景に変わることを知りました。春は、峠に立つと緑の山々の間からピンクや赤や白といった、サクラやシャクナゲやツツジが見えて、しげみには僕の大好きな野いちごがなり、木々の間からは、かっこうや、ウグイスのひなが鳴いているのが聞こえます。夏が近づくと村のあちこちにトラクターが見え、田植えが始まったことが分ります。父は峠から山を一目見ただけで、下草刈りが始まったなどと話して村の様子がよく分ります。台風の季節は峠まで行く

のが大変で、道に落ちた枝や石を片づけながら歩きます。秋の夕焼けはちよつときみしい感じだけど、真っ赤に染まった太陽は最高の景色です。春、夏、秋が過ぎると、待ちに待った冬が来ます。冬になると、峠から見える山も家の田んぼも、すべて粉砂糖をかけたような銀世界になります。その銀世界の林の中を友達と一気にかけおりたり、すべつたりして冬中遊びます。毎年、このように春夏秋冬をすごしていると、この自然の風景が見慣れてしまい、あたりまえに感じてしまうこともあります。そんな時、家にお客さんが来て峠まで散歩したりすると、決まってお客さんは素晴らしい景色だねと言ってくれます。そんな会話を通してぼくは、ぼくが見慣れたこの景色は、ここにしかない美しい景色なんだなということに気付かされます。

最近、僕はようやく分ってきました。あたりまえのようにある杉山も鳥の声も、だれかが守っていないとなくなってしまうということに。ぼくが10年前峠に立った時、ぼくより小さかった杉苗は、今ぼくを見下ろすほど大きくなりました。これからもっと杉が大きくなると、峠の景色はせまくなつて見えなくなるかもしれない。でもぼくは、この木の向こうにある里山の風景を生涯忘れずにいようと思います。なぜなら峠からの景色は、ここにしかない景色だからです。